主節における主語標示ガの発達について

――中央語における――

竹内 史郎（成城大学）

この発表の目的

- これまでの主語標示についての歴史的な研究（野村1996、山田2010 他）では、かつての主語標示の特性について十分に明らかにされているとは言えない。Cf. Frellesvig 2010 「属格主語標示 (genitive subject marking)」
- 従来の研究を参照しても（山田2010等）、どのような歴史的な変化が生じて、その結果現在の京都方言のあり方へと至っているのか、よくわからない。
- 主文の焦点の位置に着目しつつ、主文における時代語の主語標示ガの特性、およびその変化について論じていく。

この発表の構成

1. 格標示、語順、有生性効果
2. 情報構造と格標示
3. 現代京都方言
4. かつての京都方言
5. 歴史的変化
6. まとめ

格標示、語順、有生性効果

現代京都方言における語順と有生性効果の対応関係（竹内・松丸2015a）

	high－low	high－high	*low－low	*low－high
語順	－	＋		

節の要素が焦点化されない環境では語順と有生性効果が協調することによって、主語と目的語の区別が行われている。

人間名詞である項と
無生名詞である項が共起すれば

（「どうなったらおれの勝ちなん?」の返答として）
山田　ビール　飲み干したらね

（「どうなったらおれの勝ちなん?」の返答として）
ビール　山田　飲み干したらね

語順にかかわらず人間名詞である項が主語、
無生名詞である項が目的語となる。

人間名詞である項と
人間名詞である項が共起すれば

（「どうなったらおれの勝ちなん?」の返答として）
山田　田中　押し出したらね

（「どうなったらおれの勝ちなん?」の返答として）
田中　山田　押し出したらね

先行する項が主語となり、後続する項が目的語となる。

有生性効果、語順

1. high-lowという有生性効果が、主語と目的語の区別における曖昧性を排除する手段としてはたらいている
2. 項の解釈において曖昧性が認められる場合のパターンはhigh-highに限られる
3. high-highにおける曖昧性を排除する手段として語順が機能する
4. 有生性効果及び語順は、格標示と等価で代替可能な手段である

現代京都方言における語順と有生性効果の対応関係（竹内・松丸2015a）

	high－low	high－high	*low－low	*low－high
語順	－	＋		

節の要素が焦点化されない環境では語順と有生性効果が協調することによって、主語と目的語の区別が行われている。

節の要素が焦点化されない環境におけるガの出現

- あ、月が　出てる
- なんか、虫が　とまってますよ
- ようやく、山田が　田中押し出した

- あ、月　出てる
- なんか、虫　とまってますよ
- ようやく、山田　田中押し出した

節の要素が焦点化されない環境においてガとφは、文の意味への貢献という観点からも情報構造の観点からも対立しない。

無助詞であることは、有形格標示の省略ではない

有生性効果や語順は、述語の項を同定する手段として格標示と等価であり、それらが決め手となれば、格標示という手段は不要。

ガとφが交替しているかのように見えるのは、有生性効果や語順が選択されたり、格標示が選択されたりすることから生じている。

無助詞主語の文では、格標示という手段が抑制されていると考えられる。無助詞であることは有形格助詞の省略ではない。

述語の項の同定のための手段の違い

- 格標示以外の手段
- 格標示という手段

無助詞であることは「ハダカ格」でも「ゼロ格」でもない。

情報構造と格標示

主語の焦点化が期待される文脈

Ａ：誰が　田中　押し出したん？

Ｂ：山田が　田中　押し出してん

Ｂ´：＃山田　田中　押し出してん

無助詞主語の場合、文焦点の解釈が生じてしまい自然な返答とならない

主語の焦点化が期待される文脈

Ａ：誰が　暴れたん？

Ｂ：山田が　いきなり　暴れてん

Ｂ´：＃山田　いきなり　暴れてん

同様に、無助詞主語の場合、文焦点の解釈が生じてしまい自然な返答とならない

主語の焦点化が期待される文脈

Ａ：何が　倒れたん？

Ｂ：庭の木が　倒れてん

Ｂ´：庭の木　倒れてん

ガ格主語でも無助詞主語でも自然な返答となる。

述語の焦点化が期待される場合

Ａ：最近山田見いひんね

Ｂ：昨日そのへん　山田　歩いてたで

Ｂ´：＃昨日そのへん　山田が　歩いてたで

ガ格主語の場合、項焦点ないし文焦点の解釈が生じてしまい自然な返答とならない

述語の焦点化が期待される場合

Ａ：最近星見えないね

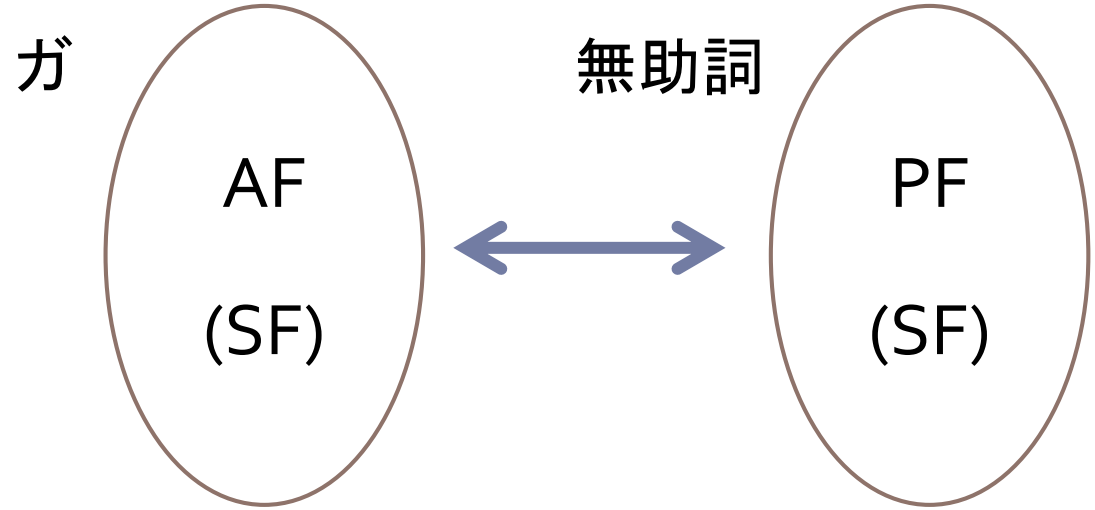
Ｂ：昨日　星　見えてたで

Ｂ´：＃昨日　星が　見えてたで

やはりガ格主語の場合、項焦点ないし文焦点の解釈が生じてしまい自然な返答とならない

現代京都方言における焦点の範囲の調整

A項ないしSA項が関わる場合

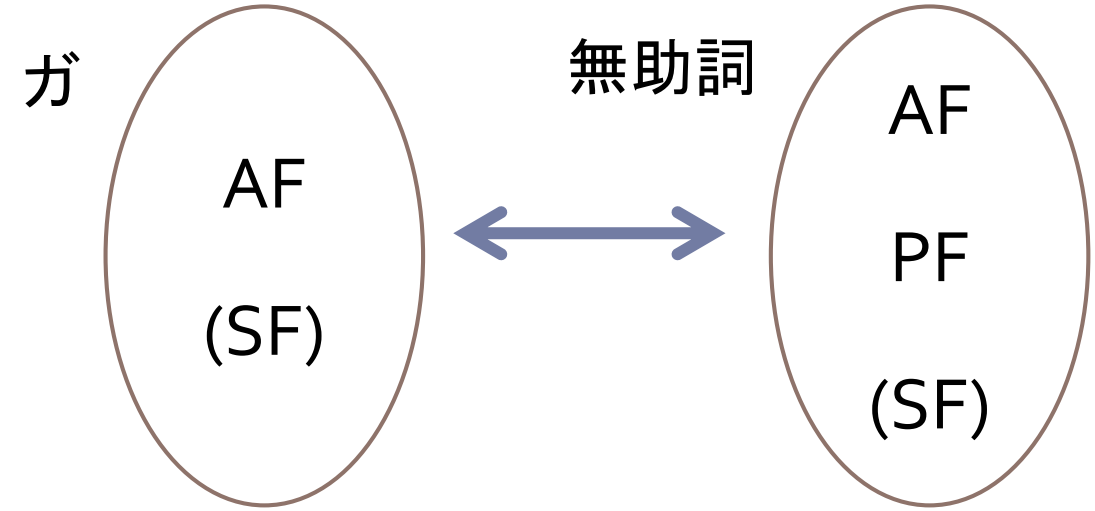


AF：項焦点

PF：述語焦点

SF：文焦点

SP項が関わる場合



A項、S_A項が関わる場合（竹内・松丸2015b）

- A項ないしS_A項が無助詞であると述語焦点の解釈や文焦点の解釈が生じてしまい、項焦点の解釈が抑制される。
- すなわち、A項ないしS_A項が無助詞である場合、述語が必ず焦点の範囲に入ってくることになるが、これを阻止するために行われるのが、A項とS_A項へのガによる標示であると考えられる。
- また、ガの標示がないことが述語焦点であることを示すこととなっている。

Sp項が関わる場合（竹内・松丸2015b）

- Sp項においては無助詞である場合でも項焦点の解釈が生じ得るので、Sp項が無助詞である場合、項焦点、文焦点、述語焦点いずれの解釈も成り立つ。
- したがって、述語が焦点の範囲に入ってくることを阻止するためにガによる標示が行われるとは言えない。
- ただし、述語焦点であることが期待される文脈では、ガの標示のないことがそうであることを示すこととなる。

現代京都方言の焦点の範囲の調整

- 現代京都方言には、焦点標識と呼ばれるものがなく、述語焦点であることを表す終助詞もない。
- ガのありなしによって焦点位置の調整が行われていると言うことができる。

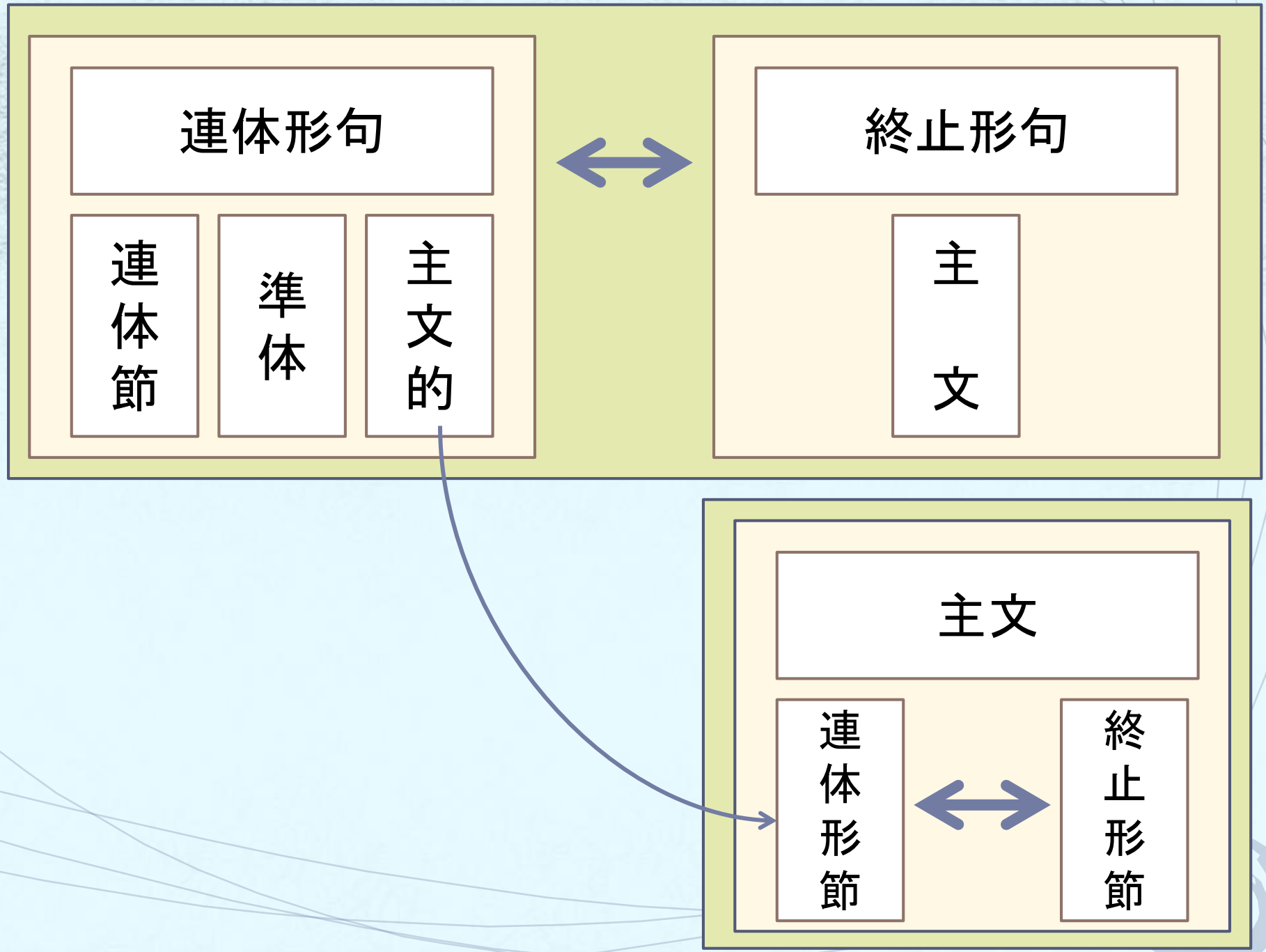
かつての京都方言

節の種類と格標示の相関(金水2011)

	主文/埋め込み文	埋め込み文の統語的機能	「の」「が」による主語表示の可能性
終止形句	主文	―――	×
連体形句	埋め込み文	名詞的	○
已然形句	埋め込み文	副詞的(条件句)	○

	終止形句	連体形句等	ミ語法
主語	ゼロ格	ゼロ格/の･が	ゼロ格/を
目的語	ゼロ格/を	ゼロ格/を	―――

節の種類と主語標示が相関するとすれば、それらに何らかの形で情報構造上の機能が対応していると予測される。


連体形句
連体節
準体
主文的
終止形句
主文
主文
連体形節
終止形節

宇治拾遺物語の調査について

- 「巻一ノ一」から「巻六ノ四」までを調査範囲とし、249例の主文の終止形節と32例の連体形節が得られた。なお、主語節を含む例は今回は除外した（野村1996）。
- 焦点の範囲について、かつての主文の終止形節及び連体形節が、現在の主文の終止形節とは異なった性質をもっていることを明らかにする。
- すなわち、かつての終止形節、連体形節はそれ自体が、主文の焦点の範囲を制限するものであったことを明らかにする。

注意すべき用例１

- 道はせばくて、馬何かとひしめきけるあひだ、此大童子、走りそひて、鮭を二つひきぬきて、ふところへひきいれてんげり。（73頁6）
- 大童子「さまでやはあるべき」などいふ程に、この男、袴をぬぎて、ふところをひろげて、「くは、見給へ」といひて、ひし＼／とす。（73頁15）

注意すべき用例２

- その御もとに、ことのほかに色黒き墨ぞめの衣のみじかきに、不動袈裟といふ袈裟かけて、木練子の念珠の大なるくりさげたる聖法師、入きてたてり。（62頁2）
- 「不定のことかな」といふ程に、唯近に近くなりて、はら＼／とおるゝ程に、これ見よ。誠におはしたるは」といへば、利仁、うちほゝゑみて、「何事ぞ」と問ふ。（80頁13）

文焦点（終止形節）

- …はるかより人の音おほくして、とゞめき來る音す。（55頁14）
- 「これは日比白山に侍つるが、みたけへ參りて、いま二千日候はんと仕候つるが、齋料つきて侍り。…」（60頁13）
- 此鮭につきたる男「せむずる所、我も人もふところを見ん」と云。（73頁14）
- 昔、池の尾に、善珍内供といふ僧住ける。（98頁7）

文焦点（終止形節）

- そのほど、舟にのりたるもの、船ばたにゐて、**うつぶして海を見れば**、山の影うつりたり。（128頁11）
- よさりいかにもなど、思てあるほどに、**タつかた、みる程に**、この櫃のふた、ほそめにあきたりけり。（139頁16）
- 麻とり出して、あづけたれば、**それを績みつゝ見れば**、此女ふしぬめり。（160頁13）
- み障子などはすこしふりたる程にやと見る程に、中の障子引あくれば、**きと見あげたるに**、此子と名乗人、歩みいでたり。（184頁8）

述語焦点（終止形節）

- かゝる程に、「塔のもとの地藏こそ、この程みえ給はね。いかなることにか」と、院内の人々いひあひたり。（193頁10）
- 夢さめてのち、みづから塔のもとへおはしてみ給に、地藏まことに見え給はず。（194頁1）
- 政所へ行とて、塔のもとを常にすぎありきければ、塔のもとに、ふるき地藏の、物のなかに捨置きたるを、きと見たてまつりて、時々、きぬかぶりしたるをうちぬぎ、頭をかたぶけて、すこし＼／うやまひおがみつゝゆく時も有けり。かゝる程に、かの賀能、はかなく失せぬ。（193頁6）

終止形節

	可否	主語標示
PF	可	無助詞
SF	可	無助詞
AF	不可	―――

項焦点のみ不可であるから、述語が焦点の範囲に入ってくる節タイプという言うことができる。

項焦点（連体形節）

- 「事を起こしたらん人こそはまづ入らめ。先大太郎が入るべき」と云ければ、…（120頁1）
- 「たそ。この門たゝくは」といひければ、「それがしが、とみのことにて参れるなり。いみじきかたき物忌なりとも、ほそめにあけて入れ給へ。…」（299頁11）
- 今は昔、東人の、歌いみじう好みよみけるが、螢をみて（…中略）

  東人のやうによまんとて、まことは貫之がよみたりけるとぞ。（345頁8）

文焦点（連体形節）

- 此大童子、打見て、「…」といひければ、そこらたちどまりて見ける者共、一度に「はつ」と笑ひけるとか。（74頁7）
- 簾を巻上たりける内に、よき装束きたる女のゐたるを見ければ、我さりにしふるき妻なりけり。「あのかたゐ、かくてあらんを見んとおもひしぞ」といひて、見あはせたりけるを、（166頁4）
- 布三むらとらせたれば、悦て布を取て、藁すぢーすぢが、布三むらになりぬる事と思ひて、脇にはさみてまかるほどに、その日は暮れにけり。（229頁14）

連体形節

	可否	主語標示
PF	不可	――――
SF	可	無助詞、ガ、ノ、ゾ
AF	可	ガ、ノ、ゾ

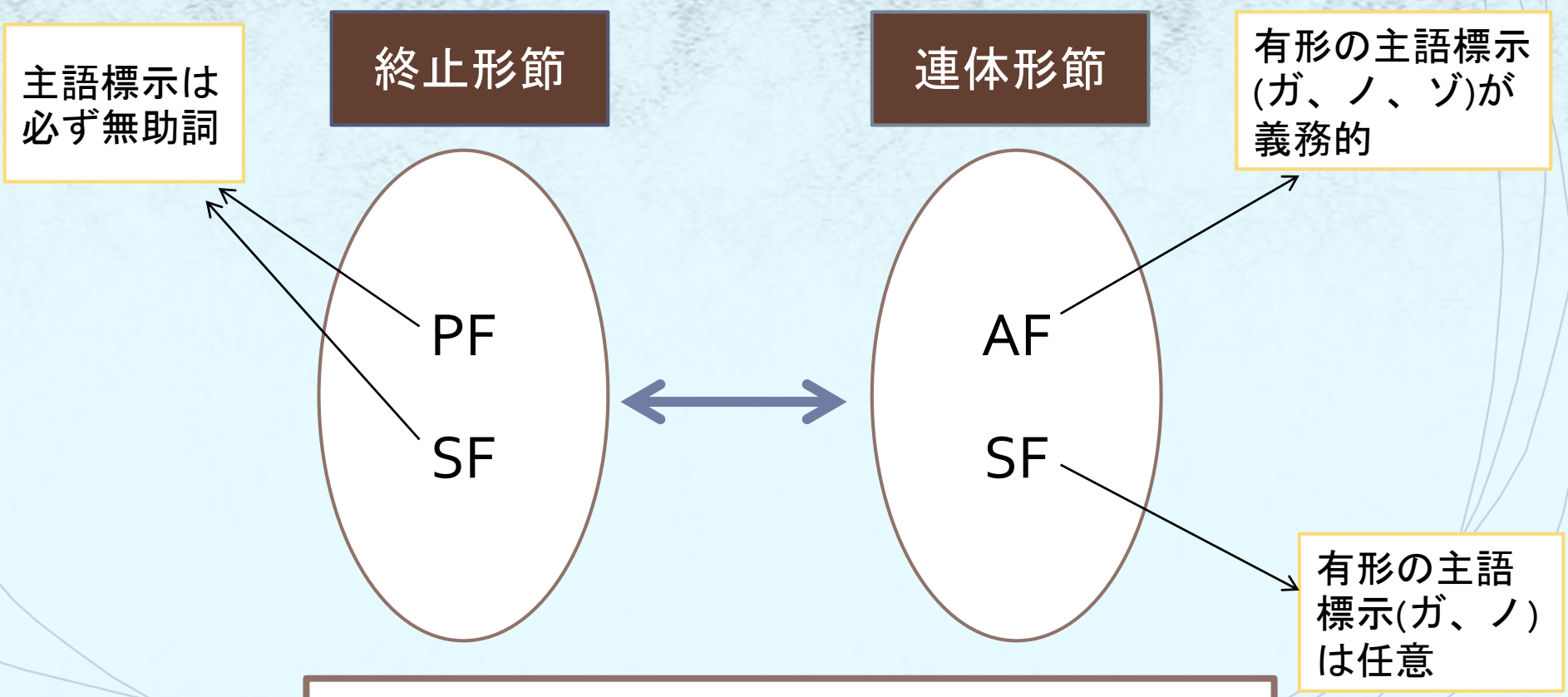
述語焦点のみ不可であるから、項が焦点の範囲に入ってくる節タイプという言うことができる。山田2010も参照。

反例となりそうな例

- そののち、その金とりの男は、いづちともなく失せにけり。…金のあるところを問ひ尋やすると思けるにやとぞ、うたがひける。その金、八千両ばかりありけるとぞ、かたりつたへたる。（155頁4）
- 「月ごろ何となくもの騒がしきほどに、御琴の音をだにうけたまはらで久しくなりはべりにけり。西の方にはべる人は、琵琶を心に入れてはべる。さも、まねび取りつべくやおぼえはべらん。…」（源氏物語・五・39頁、山田2010より）

平安期には、こうした「ハ―連体形終止」の文が散見される（山田2010）

かつての京都方言の特徴



節末の形態と主語標示が協調して
焦点の範囲が定まる。

歴史的変化

- 現代の京都ではガのありなしによって、かつての京都では節末の形態と主語標示との協調によってというように、焦点の範囲の定め方は異なるが、ともに述語焦点(PF)と項焦点(AF)の対立に重点があると言え、この点での歴史的な変化は認められない。
- 主文の新連体形節では、主語標示を無助詞としたままで述語の焦点化が行われる。このようなあり方は旧連体形節では不可能であり、終止形節でのあり方が受け継がれたものと考えられる。

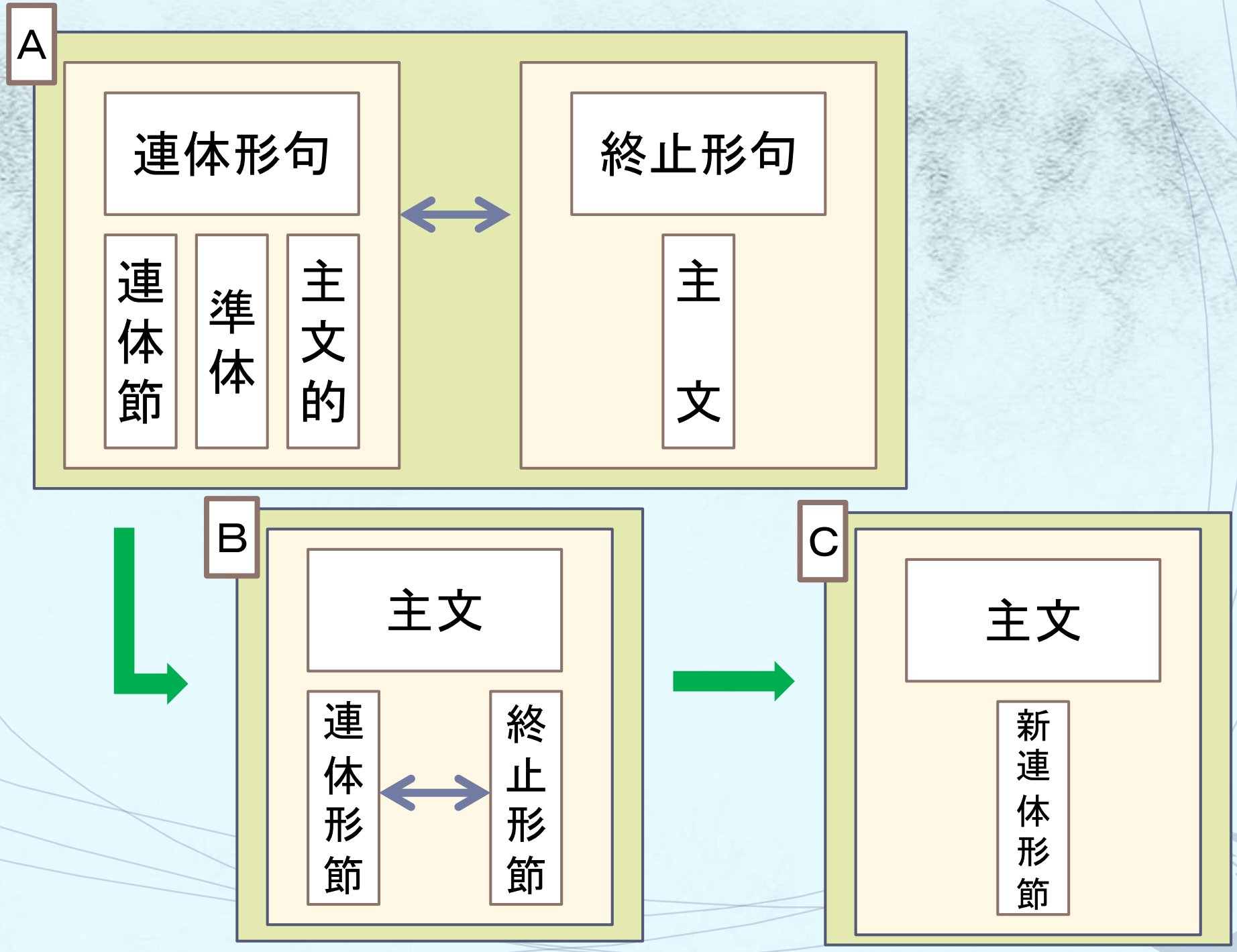
「終止形と連体形の合一」に際し、旧連体形節のあり方がそのまま受け継がれているわけではない

終止形節 → ~~終止形節~~

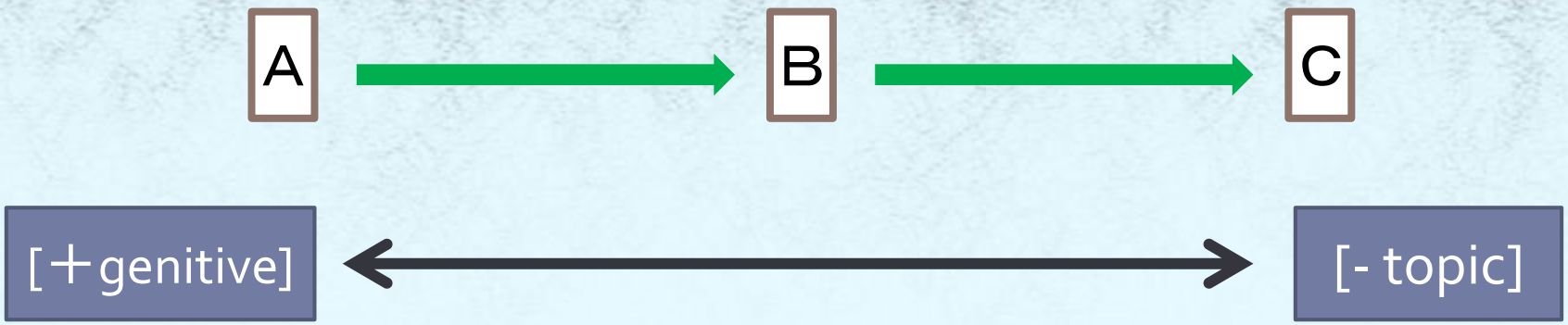
連体形節 → 連体形節

終止形節 → 新 連体形節

旧 連体形節 → 新 連体形節


A
連体形句
連体節
準体
主文的
終止形句
主文
B
主文
連体形節
終止形節
C
主文
新連体形節

主文に現れるガの変化
[+ genitive]から[- topic]へ



節末の形態によらず、ガ単独で焦点の範囲の調整が行われることとなった。

連体形句を特徴づける属格的な振る舞いから、主節の一方の節を特徴づける標識へ、さらには、無助詞やハとの対立する、取り立ての体系を形成する要素へと変化した。

ガの用法別の推移

一貫して文焦点の環境で

旧連体形節の時代　新連体形節の時代

ガ１

ガ２

代名詞および固有名詞の焦点化(山田2010)ただしノも可。

A項、S_A項の焦点化?

S_P項の焦点化?

まとめ

参考文献

- 金水敏(2011)「第3章 統語論」『シリーズ日本語史3 文法史』pp. 77-166、岩波書店
- 竹内史郎・松丸真大(2015a)「本州方言における他動詞文の主語と目的語を区別するストラテジー――関西方言と宮城県登米方言の分析――」科研費・国語研共同研究プロジェクト合同シンポジウム「アスペクト・ヴォイス・格」(8月22日、国立国語研究所)
- 竹内史郎・松丸真大(2015b)「関西方言の格標示のとりたて性と分裂自動詞性」日本言語学会 第151回大会ワークショップ「日本語方言のケースマーキングのとりたて性と分裂自動詞性」(11月30日、名古屋大学)

- 野村剛史(1996)「ガ･終止形へ」『国語国文』65巻5号、pp. 524-541、京都大学
- 山田昌裕 (2010)『格助詞「ガ」の通時的研究』ひつじ書房
- de Hoop, Helen and Monique Lamers (2006) Incremental distinguishability of subject and object, leonid Klikov, Andrej Malchukov and Peter de Swart (.eds), *Case, Valency and Transitivity*, pp. 269-287, John Benjamines.
- Frellesvig, B. (2010) *A History of the Japanese Language*, Cambridge University Press.

- Lambrecht, Knud (1994) *Information structure and sentence form: Topic, focus and the mental representations of discourse referents*, Cambridge University Press.
- Lambrecht, Knud(2000) When subjects behave like objects: An analysis of the merging of S and O in Sentence-Focus Constructions across languages, *Studies in Language* Vol.24-3, pp. 611-682, John Benjamins.